

ヘーゲルにおける無限判断をめぐる問題

岡崎 秀二郎

1. 序言

我々の日常感覚又は伝統的論理学に照らした場合、「石は人間ではない」に代表される「無限判断 (das unendliche Urteil)」はそれが自明に真である以上の意味を持たない。六世紀ボエティウスにより「無限な (infinitus)」判断と訳されその名称が定着したこの判断様態は、アリストテレスにおいては不定 (ἀόριστος)、つまり未規定的な (indefinitus) 判断とされた。『命題論』は、上に述べた判断述語を「非-人間 (οὐκ ἄνθρωπος) である」(Int. 16a30) と言い表す¹。「人間」を除くあらゆるものを提示するに過ぎないそうした未規定的名辞は、その膨大な対象領域のゆえに何らかの対象を指示するとは言えない。ために『命題論』はそれを判断を担う名辞ですらないと判定する。ドイツ哲学史においてこの無限判断の意義は、I. カント『純粹理性批判』の判断表中にそれが位置付けられたことで一定の変更を蒙る。他方 G. W. F. ヘーゲルの論理学へ目を移せば、それはカントの判断表を継受しながらも、無限判断を「馬鹿げた無味乾燥な (widersinnig und abgeschmackt)」(GW12, 70) ものと断じる点で一見伝統的論理学の見方を踏襲する。

だが『精神現象学』からして既にそこに伝統的論理学の命題形式の超克への試みが伏在することに鑑みれば、我々はそれを単純な回帰とは即断できない。すなわち伝統的論理学に従う命題は、「石」のように「表象された主語」としての基体に、その内実として「非-人間」のような「偶有性 (Accidenzen) や述語」を関係づける (cf. GW9, 42)。『精神現象学』はそうした命題観に対し、むしろ述語が「実質的意味」を担い、主語の「本質 (Wesen)」が初めてそれにより規定されるという観点の欠如を指摘する (cf. GW9, 44)。ここでヘーゲルが「思弁的命題 (der spekulative Satz)」の名の下に要請するのは、端的に主述の形式的区別の流動化である²。そして『大論理学』の「無限判断」は、主語に述語が「内属」する「定在の判断」から、述語に主語が「包摂」される「反省の判断」へのこの移行を担う。

本稿が明らかにすることを目指すのは、この無限判断をめぐる行われる判断観の推移の意味であるが、それは同時に伝統的論理学とヘーゲルの論理学との距離を意味せざるを得ない。ゆえに本稿の第二節まではヘーゲル以前の論理学にお

ける無限判断の取り扱い方を概略的に確認する。残る紙幅において『大論理学』の判断論一般が伝統的論理学に与えた変様を明らかにし、そこから無限判断論を通じて開かれる、ヘーゲルの「反省」に特有の否定性の論理の視座を示す。

2. ドイツ観念論以前の無限判断論史の概略

ドイツ哲学における無限判断史を辿る上で既に触れたカントの影響を無視することはできない。とは言え、無限判断を「質」の判断の三分法に数え入れることは既にChr. ヴォルフの論理学に見出される (cf. *Logica*, §209)。だがヴォルフの理解は否定辞の使用に関する次の区別においてやはり伝統的論理学の延長にある。つまり「非-人間」のように無限命題の否定辞はその述語を刺激するのに対し、否定命題は「ペトロは人間ではない (Petrus non est homo)」のように否定辞が繫辞 (copula) を刺激する (cf. *Logica*, §207-8)。つまり無限命題は「非-人間」のように否定の外装 (species negativae) を伴うが、その述語が不定な何かを含意する点で命題の繫辞自体は否定されておらず、実質的には肯定命題である (cf. *Logica*, §209)。尤もヴォルフがアリストテレスのように、否定命題から区別される無限命題を適切な判断の範疇から排除することを意図していた訳ではないことは確かである。ヴォルフの意図はむしろこうした種類から更に区別された否定辞の用法を浮かび上がらせることにある。例えば「魂は非-物質的である (Anima est immaterialis)」という無限命題は「魂は物質ではない (Anima non est materialis)」という否定命題と等価であるが、命題「神は無限である (Deus est inifinitus)」にはそうした否定的解釈の余地は存在しない。一方で「非-物質的 (immaterialis)」が物質の外延的性質を前提にした否定性を含意するのに対し、「無限 (inifinitus)」述語それ自体は文法的に否定辞を伴いはするが、神の肯定的な実在性に由来するものとして、否定命題に関連づけられ得る不定な述語には数え入れられない。

カントが『純粋理性批判』において無限判断を「否定的述語によってなされる論理的肯定の価値」(KrV A72/B97) から考察すると述べる時、ヴォルフへと継承された無限判断観がその念頭にあったことは疑い得ない。一方で『純粋理性批判』はヴォルフと同様に無限判断に質の判断の地位を与え、無限判断と否定判断の否定辞の意味を殊更に区別しない。だがカントの批判的となったヴォルフ哲学に、そのままカントの無限判断論の祖型を見出しうるかという問は慎重を要する。概念から実在性を導く神の現存在の存在論的証明を否認するカントにあって、ヴォルフと同様に無限判断と区別される、無前提に実在性が担保された「無限」

述語を容認したということはありません³。カントの無限判断への評価がむしろヴォルフ以前の伝統的立場に接近していることを特徴づけるのは「超越論的論理学においては無限判断は肯定判断から区別されねばならない」（KrV A71/B97）という判断表への言明であるが、カントはこの点につき次のように述べる。

仮に私が魂について「魂は死なない（ist nicht sterblich）」と言ったとすれば、私は否定判断によって少なくとも一つの誤謬を除去したことになるだろう。ところで「魂は不死である（die Seele ist nichtsterblich）」という命題によっては、私は魂を不死的なるものの無制限の範囲の中に置き入れることによって、論理の形式面からは事実肯定したことになる。[...] 後者の命題が主張するのは、魂はあらゆる死すものが除去されてもなお残るところの、無限に多くのものの一つに他ならない、ということに過ぎない。[...] しかし、この[あらゆる可能的なるものの]空間は、このような除去にもかかわらず依然として無限的である。そしてなお多くの部分がそれから除去されることができる。が、そのために魂の概念は少しも拡大されもせず、また肯定的に限定されることもないのである。（KrV A72/B97）

このカントの無限判断の述語の理解は、ある面でアリストテレス来の不定の判断の理解を繰り返している。「不-死」という述語は「非-人間」という名辞と同様に、「死すべきもの」自身を除くあらゆるものを、論理的肯定性によって提示する。だがそうして提示された述語領域は、「死すべきもの」という一述語を取り除いても一向制限されない無制限なものであり続ける。それゆえ否定判断が主語と特定の一つの述語との結びつきを断ち切るのに対し、無限判断はそもそも主語と論理的肯定によって結びつく一つの述語を特定しない。更には無限述語の無前提な実在的肯定性を認めないという超越論的観点に立つカントにあっては、アリストテレスと同様に無限判断から内容上の肯定的判断としての地位をも剥奪することに何らの躊躇も存在しない。結果としてそれは、無限判断は論理・形式的には肯定判断であるが概念の内容上は肯定性をもたない、というヴォルフと同様の結論を導くが、その裏にある意図は真逆である。そして同時に、主語や述語の不定性を伴う判断であるという伝統的な無限判断の理解は、カントの元で、否定辞によって述語の可能的領域が制限されない判断であるという形へ、つまりは「無限判断」という呼称により相応しい形へと精緻化されたと言える⁴。

3. ドイツ観念論における無限判断論の行程

3. 1 無限判断の消極面

カントの無限判断は、主語を肯定的に規定しない不定の判断の姿を保つ。だがこの後無限判断の意義は、『純粹理性批判』判断表における「質」の三分法という新たな枠組の中で探求されることになる。そこでは無限判断は肯定・否定判断のそれぞれから区別され、他方ではそれ自体が肯定・否定判断の統一として「質」の判断を統一する (cf. KrV B111)。とりわけ S. マイモンは前者の面に関し、「狭義の判断は主語と述語の間の規定可能性という関係が規定される判断であり、それだから無限判断は狭義の判断から排除されねばならない」(Maimon V, 115) と定義する⁵。それというのも無限判断は「主語と述語がいかなる規定と規定可能性の関係の内にもない (in gar keinem Verhältnis von Bestimmung und Bestimmbarkeit stehen)」判断だからである (Maimon V, 114)。例えば判断「徳は非-四角である」の述語「非-四角である」は、主語「徳」の規定可能性を何ら限定しない。それゆえこうした判断は「質」に対応する反省概念に則しても規定可能性の関係を欠く⁶。すなわち「徳は非-四角である」が無限判断であるというのは、「徳」と「非-四角である」とが「相互に対立する (entgegen gesetzt) のでもなければ、また客観の規定に関して相互に合一する (übereinstimmen) のでもないということである」(Maimon V, 127)⁷。無限判断の主述の結びつきは合致及び対立の関係を欠く点で肯定・否定判断から区別され、また恣意的なものに過ぎない (cf. Maimon V, 108)。

この無限判断と肯定・否定判断との区別を強調する方向性は、フィヒテの影響下にあった若きシェリングへと受け継がれる。その考えによれば、「円は非-四角である」という判断からなおも円が四角以外の何らかの形を持つことを導くとすれば、それは「円は丸い」という経験的な総合命題を前提することで可能となる。つまりこの判断は否定判断ではあっても無条件に無限の述語領域を開く無限判断ではない。対してマイモンの「徳は非-四角である」に類比的な「円は非-甘くある」は「必然的に無限判断である」(cf. HKA I 2, 151)。何となれば「円」はその措定だけで無条件に述語「甘い」の領域に対立した領域に措定されるからである。但しここでシェリングが依って立つ、無限判断が経験的命題を含意しないという前提は、その念頭にあったフィヒテの判断論から理解されねばならない。

3. 2 無限判断の積極面

1794年の『全知識学の基礎』において、フィヒテはカントから継受した学問体

系構想の基礎付けを三つの根本命題、„Ich = Ich“、„Nicht-Ich nicht = Ich“、„Ich = Nicht-Ich“のうちに求める。そこでカントの判断論は次のように継受される。第一にフィヒテは„Ich = Ich“に形式上対応する同一性命題 $A=A$ を、自我が行う「判断」によって成立すると考える (GA2, 258)。それは、「 $A=A$ と言うのと同じであり、なぜならばそれが論理的繫辞 (logische Kopula) の意味であるからである」 (GA2, 256)。そして、「命題 $A=A$ が適用され得る全てのものは、この命題が適用され得る限りの限度において実在性を有」し、そこから「人は実在性の範疇 (*Kategorie der Realität*) を得る」 (GA2, 261)。第二命題„Nicht-Ich nicht = Ich“はこの繫辞を否定する否定判断であり、そこに成立する主述の関係は「対立」である⁸。またこの「対立されてあることから非存在への導出の形式のみを見ることで人は否定性の範疇 (*Kategorie der Negation*) を得る」 (GA2, 261)。だがフィヒテにあって最も特徴的なのは、絶対的主観としての自我が担う命題を「原理」に据えた点である。命題 $A=A$ は論理的繫辞を含みはするが、その主語と述語に関し「我々は何らかの、経験的意識に与えられたある種の命題から出発せざるを得ない」 (GA2, 261)。しかしここで命題„Ich = Ich“を考察すれば、それは反省主体が自己自身を反省の対象とするのだから「自我はおのづから自己を定立する、そして自己自身による単なる定立によって自我は存在する」 (GA2, 259)。同様に第二命題も、非我により「端的に対立が行われ得るのは、ただ自我に対してのみである」 (GA2, 266)。

こうしてカントの判断が絶対的主観が担うものとして再構成されるとき、残る第三命題„Ich = Nicht-Ich“は、ヴォルフ来の定式をあてがえば、述語において否定の外装を持ちながらその実繫辞の肯定性は保たれる、無限判断の特徴に該当する。確かにフィヒテは「制限 (Limitation)」の範疇を念頭に置きつつ、第三命題においては「現実性と否定性の概念に加えてなおも可分性の概念が存在している」ことを想定する (cf. GA2, 270, 282)。つまり第三命題は非我という否定的述語の措定を通じて、述語の可能的領域を「制限」しない未規定的な判断を構成する筈である。だがフィヒテの考察はそこから更に複雑に進行する。第三命題は、一面においては「自我」と「非我」が制限を介した可分的存在であると主張することで、自我が未規定的な「絶対的自我」ではなく規定された「何か (*etwas*)」であると語ることを可能にする (GA2, 271)。この意味での第三命題は、自我に対立する非我という第二命題の構造を語るための不可欠の前提である⁹。しかし同時に第三命題は、主語「自我」が自己自身ではない述語一般に開かれる未規定的判断である。それゆえフィヒテはこのような判断を、「自我に関してなにごととも語られることがなく、述語の場所が自我の可能的規定に対して無限に空虚のままにされる (ins

Unendliche leer gelassen) ような、『自我はある (Ich bin)』という「絶対的定立 (die absolute Thesis)」である、とマイモンの理解を踏まえつつも特徴付ける (GA2, 277)。

こうして導かれた主語と繫辞のみから構成され、ゆえにもはや判断とも呼び得ない、„Ich bin“こそフィヒテが最終的にカントの名称を尊重しつつ「無限判断」と呼ぶものに他ならない (cf. GA2, 278)。つまり第三命題は一方では可分性の原理によって第二命題の対立構造の前提を担うが、„Ich = Nicht-Ich“が真に「無限判断」であると言われるには、それが同時に第一命題における「定立から定立されたものを反省することへと移る、自我の移り行き」としての「である (ist) という言葉」(GA2, 259 anm.) を、„Ich bin“として基礎づけることが意味されねばならない。こうしてフィヒテの第三命題は、それが無限判断であることによって初めて、質の判断の三分法の不可分な統一を、還帰的に基礎付けていると評価しうる¹⁰。

3. 3 ヘーゲルへの無限判断論の受容

以上無限判断論史の概要を踏まえるとき、何よりフィヒテがヘーゲル対し与えた影響は無視し得ない。フィヒテの三命題の根源的根拠を成すのは統一された自我であり、「判断 (Ur-theilung)」とはこの根拠の分割 (theilen) である。ヘーゲルにおいても判断とは「根源的一者の根源的分割 (die ursprüngliche Theilung)」(GW12, 55) として想定される¹¹。シェリングとともにフィヒテに対峙したイェーナ初期にも同様であり、「反省は理性として絶対者へ関係し、この関係によってのみ反省は理性であって、反省はあらゆる存在と制限されたものを絶対者に関係づける限りで、自らとそれら全てを廃棄する (vernichten)」(GW4, 16f.)。ここに「哲学的反省」として描かれるのは、自らを制限的なものとして対象化しつつ、無限に未規定であり続けることで遡行的に自らの反省の運動を基礎づけるフィヒテの「絶対的定立」の姿であり、「思弁 (Spekulation)」(GW4, 16) とはその限りの反省の営みである。

だが同時にフィヒテの哲学に現れる絶対的定立としての„Ich = Ich“は、「思弁の絶対的原理ではあるが、この同一性は体系によっては示されていない」(GW4, 37) ことに注意されねばならない。なぜなら、「同一性は同時に現象へと措定されることはなく、あるいは同一性はまた完全に客観へと移行することもない」(GW4, 33) からである。フィヒテにとって質の判断の統一の要諦を成す第三命題„Ich = Nicht-Ich“は、第二命題の前提である可分性と第一命題の絶対的定立を同時に確保しようとする。だが後者によって前者は消滅し続けねばならないのであるから、そこに同一性の原理はあっても、同一性に根拠づけられ定立されたものによる体

系は存在しない。その意味で「自我が自らを客観化していない」（GW4, 37）フィヒテの哲学に補完されるべきものとして、絶対的客観性の表現に相当する「自然」を想定する点でこの時期のヘーゲルはシェリングと軌を一にする（cf. GW4, 69）。だが『大論理学』は、むしろ絶対的客観へと至り得ない絶対的主観としての「自我」から体系を始める企て自体を放棄する。『大論理学』における「根源的一者」とは「概念」（cf. GW12, 14）であり、哲学的反省としての「思弁」は、「自我」として特権化されない任意の「概念」による無限判断として実現されねばならない。

4. 『大論理学』における無限判断論

4. 1 伝統的論理学の判断類型と否定辞の用法

絶対的主観ではなく「概念」が担う『大論理学』の判断論は、「定在の判断（das Urteil des Daseins）」と呼ばれる区分において、無限判断を介した質の三分法の統一を描く。だがそこでは、ヘーゲル以前に維持されていた判断論の枠組み自体に決定的変更が加えられる。まず最も手近な肯定判断「バラは良い匂いがする」に即して、伝統的な不定・肯定・否定の判断に対するその説明を引用しよう。伝統的論理学に従えば、そこでは表象された「バラ」という個別の基体的存在に、普遍的な「良い匂いがする」という述語が「内属」させられる。しかしこの述語を担う名辞は、「規定一般ではなく主語の規定」として不定な名辞から区別されねばならない（cf. GW12, 62）。例えばそれは、「何らかの未規定な良い匂いではなくて、バラの良い匂い」（GW12, 62）を意味せねばならない。このとき「何らかの未規定な良い匂い」に対してそこに包含される「バラの良い匂い」は、「普遍」に対する「特殊」な述語という範疇として表現できよう。つまり有意味な肯定判断の手近な表現はむしろ、*„Das Einzelne ist ein Besonderes“*「個別的なものは特殊なものである」（GW12, 65）であって、逆に「個別的なものは普遍的である（Das Einzelne ist allgemein）」は、不定の判断の表記と位置付けるべきである¹²。さて、前者の肯定判断はむしろその述語が未規定的な普遍ではないということから導かれてきた。つまり、それは「個別的なものは抽象的に普遍的ではない（Das Einzelne ist nicht abstrakt allgemein）」という否定判断と同義であり、「『個別的なものは特殊なものである』は、否定判断の肯定的表現である」（GW12, 65）と言えよう。

まずここで、不定の判断の述語は未規定な「普遍」であり、そこに否定辞が伴われるかどうかは度外視されている点が着目される。「非-普遍的なもの（das Nicht-Allgemeine）」は直接的な帰結により特殊なものである」（GW12, 66）

という言明に象徴的に現れるように、むしろここにおいて否定辞の第一義的な意味は、未規定な普遍の領域を限界付け、特殊な領域を規定するものとして位置付けられている。だがそれだけではない。否定判断„Das Einzelne ist nicht allgemein.“が肯定判断„Das Einzelne ist ein Besonderes.“へと書き換えられることに明示的に現れるように、肯定判断と否定判断は、この特殊な領域を規定するという点において、表現上は区別されても概念範疇上は区別され得ない。つまり、否定判断„Das Einzelne ist nicht allgemein.“にあつては、「関係 (Beziehung) の形式から規定 (Bestimmung) の形式への推移によって、繫辞の「ない」 (das Nicht) がまた述語へと引き入れられねばならない」(GW12, 66)。そうした結果、肯定判断„Das Einzelne ist ein Besonderes.“が得られ、「主語の述語への関係が本質的になお肯定的である」(GW12, 67) ことが保たれうる。つまり上に述べた普遍領域を限定し特殊な領域を規定する否定辞の意味に照らして、„Das Einzelne ist nicht allgemein.“と„Das Einzelne ist ein Besonderes (das Nicht-Allgemeine).“は同一の内容を意味するものであり、両者はその表現上肯定・否定を区別されうるに過ぎない。そうであればここではもはや、否定辞が繫辞を刺激するか述語を刺激するかという、ヴォルフ、カントを介しフィヒテ及びシェリングにおいてさえ維持され、伝統的な判断類型を導いてきた否定辞の用法の一切が放棄されていることになる。

4. 2 無限判断と判断の限界

ヘーゲルの術語において、このような否定判断に伴われる否定、「否定的関係を媒介として成立する」「特殊性」は「第一の否定 (die erste Negation)」と呼ばれる (GW12, 65)。この否定の契機を伴う肯定・否定判断に対し、不定の判断„Das Einzelne ist allgemein.“の主語「個別」は「直接的にそれ自体で存在するもの」であり、述語に現れる「普遍」は「悪無限的数多性 (die schlecht unendliche Vielheit)」(GW12, 64) を持つと言われる。ヘーゲルの無限判断論に最も特徴的なのは、この不定の判断に相当する判断類型に対し、フィヒテ以降「思弁」を体現する原理として導入された「肯定的無限判断 (das positiv-unendliche Urteil)」を明確に区別する点である。この「肯定的無限判断」によって質の判断の統一が自己還帰的に遂行される過程をヘーゲルは次のように説明している。

定在の判断においては、主語は直接的な個別的なものとしてあり、その限りでもむしろ或るもの (Etwas) 一般としてあるに過ぎない。否定判断と無限判断との媒介によって初めて主語は個別的なものとして措定されているのである。

こうして個別的なものは自分と同一的であるところの自分の述語へと自己を連続させているものとして措定されている。それとともに普遍性もまた同じくもはや直接的な普遍性としてではなく、もろもろの区別されたものをひとつに取り集める運動としてある。肯定的無限判断はまたまさに、普遍的なものは普遍的である、と言っているのであり、こうしてそれは同じように自己自身への還帰として措定されているのである。（GW12, 70）

定在の判断の出発点は最も抽象的な判断形式を有する肯定判断, „Das Einzelne ist allgemein.“であった。だが質の判断が統一を保つ限り、その判断の繫辞（ist）は主語の絶対的定立として基礎づけられることを要する。この絶対的定立に相当する肯定的無限判断は, „Ich bin“と同様、一方で不定の述語領域へ開かれた同一的措定である点で, „Das allgemeine ist allgemein.“と表記されうる。差し当たりこの絶対的定立はイェーナ期の思弁と同様、絶対的無限に関係づけられる限りでのあらゆる制限の廃棄、すなわち「否定の否定」（GW12, 70）を通じて行われる。「第一の否定」は、先行する普遍的な不定の領域を規定することを第一義的に意味した。「否定の否定」とはこの制限を否定し、再び主語の肯定的措定を無限に未規定に置くものである。このように述語の規定性が否定され無限に不定に止まることで成立する普遍は同時に、「否定的統一（negative Einheit）」（GW7, 88）と呼ばれる¹³。

そしてこの無限判断が開く不定性は、不定の判断が伴うような「直接的な普遍性」から区別されねばならない。すなわち不定の判断は「石」が「人間ではない」としても、なおも他の何物かであることを含意する点で、やはり未規定な述語領域を伴う。だがその不定性はあくまで都度の有限的规定性を否定することで確かめられるもの、つまり「無限が有限へ関係においてのみ無限である」という「有限と無限の交互規定」の内に成立し、常に「無限累進（*Progreß ins Unendliche*）」として確かめられる「悪無限」である（GW21, 129）。それに対し思弁が実現する無限とは、 „Ich bin“と同様「自己還帰する存在、自己自身へ関係としての無限」（GW21, 136）であり、この無限こそが不定の判断, „Das Einzelne ist allgemein.“の主語「個別」の定立、あるいはその繫辞の移りゆきを、直接的にではなく還帰的に基礎づけうる。したがって肯定的無限判断は他方では、「個別性が初めて規定された規定性として措定されるような、個別性自身の自己内反省であり」（GW12, 70）り、その限り, „Das Einzelne ist einzeln.“と表記しうる¹⁴。

要約すれば、不定の判断, „Das Einzelne ist allgemein.“は、無限の述語領域を伴う „Das allgemeine ist allgemein.“の同一的措定が、「個別」を主語に取る, „Das Einzelne ist

einzeln.“の同一的措定に重なることで初めて自己還帰的に基礎づけられる。それゆえ不定の判断が「否定の否定」を介して開く未規定な普遍性は、「個別」の絶対的定立へと還帰すべきものであり、その還帰を待って初めて、「否定的統一」としての「普遍」は「個別」に対する諸々の述語をとりまとめる意味をもつ。この意味での「真の無限」は、都度の有限的規定性だけでなくあらゆる有限性の消滅により定立の運動が自己還帰することで初めて明らかになる性質のものである。つまりは、「過程 (Proceß)」として示される悪無限的な不定の判断の繫辞の肯定性に対し、常にその「結果 (Resultat)」(GW21, 135) から明かされるところの真無限的な「肯定的無限判断」は、この過程自体を遡行的に基礎づける。この未規定な述語へ開かれた繫辞の意味において、無限の真理は悪無限的過程の進行の内に言わば「潜在的に既に現前している (an sich schon vorhanden)」(GW21, 130)。

4. 3 無限判断による判断の止揚

伝統的判断類型に関し、前項までのようにヘーゲルは肯定・否定判断を有限的規定性に関わる判断として一括して扱い、無限判断を悪無限的な不定の判断と真無限的な肯定的無限判断へと区分する¹⁵。だがヘーゲルは終始、無限判断は「判断ではない」という伝統的評価自体を覆すことはなかった。イェーナ論理学によれば、「その述語において完全に未規定的な判断」である不定な判断は既に、「判断ではない」(GW7, 88)。あるいは『精神現象学』の「観察する理性」が人間の骨相に関して発する無限判断「精神の存在は骨である」も同様である。「それによって思念され意図されているのは、人が見たり手に取ったり、突いたり等々することのできる或るものではないが、しかし言われているのはこのことである」(GW9, 190f)。つまり「精神の存在は骨である」という判断は、一面骨相の観察に即す同一性判断であるが、他面その述語「骨である」は、むしろ直接手元にある骨自身に即さない諸々の述語へと開かれ、それらをひとつに取り集める述語である。この意味での無限判断は、「直接性」から「否定性」へと「自己自身を止揚する判断 (ein Urtheil, das sich selbst aufhebt)」(GW9, 191) であるとも表現される。

他方で肯定的無限判断と同様に、実際には述語を欠いている判断としてイェーナ期から一貫して位置付けられていたのが、『大論理学』が「否定的無限判断」として取り上げる判断様態である。ここに想定されるのは、マイモンの「徳は非-四角である」、あるいはシェリングの「円は非-甘くある」に類比的な、「精神は赤くない、黄色くない」といった例である。その特徴は、「その両規定が主語と述語とに否定的に結びつけられ、その一方が他方の規定性を含まないばかりでな

く、また他方の普遍的領域をも含まない」(GW12, 69) ことにある。シェリングの説明では、「円」の措定はそれだけで「甘くある」ことの普遍領域、言い換えれば何らかの味を持つというより高次の述語領域の外に措定される。つまり精神が色一般の規定を持たないがゆえに「精神は赤くない」が真となりうるように、「否定的無限判断」の繫辞に加えられた否定辞は、「精神」や「円」にとっての特定の色や味のみならず、色や味一般の否定を含意する。それは、繫辞を刺激した否定判断の否定辞が普遍的な述語領域の限定を意味すること、つまりは述語領域全体に及ぶ「総体的否定」(GW12, 67) には至らないことに対比的である。

ヘーゲルにおいてこの否定的無限判断は、ある特定の不法行為 (Verbrechen) がより普遍的で包括的な「法としての法」を否定する関係である (cf. GW12, 70)。そこでは「述語の全領域が否定され、もはや述語と主語との間には、何らの肯定的関係もない」(GW12, 69)。つまり否定判断においては繫辞に加えられた有限的な否定辞が規定へと移され得たのと対照的に、「否定的無限判断」では述語領域全体にわたる否定が、判断を成立させる繫辞そのものを無限に否定し消失させる。この否定の意味において、「否定的無限判断における区別は言わば、なおも判断が持続するには、過大である」(GW12, 70)。対して「肯定的無限判断においてはただ同一性のみがあり、完全に欠如した区別のゆえにそれは最早判断ではない」(GW12, 70)。そうであれば無限判断として残されるのは、最早判断の形態を持たない、無限に進行する繫辞の同一的な関係か、あるいは繫辞の同一性を残さない無限に進行する単なる否定 (Nicht) としての否定的関係を結果するのみである。

5. 結論に代えて—無限判断と反省の契機

『大論理学』が変更を加えた否定辞の意味は、繫辞と述語の間、更に言えば否定判断と肯定判断の間における差異を持たない。その有限的な否定辞の意味は、不定の判断が伴う「悪無限」に象徴的に現れるように、その都度既に限定された規定性を否定する相対的なものでしかない。コーヘンは無限判断を、判断述語を不定の領域へと開放するのみならず、むしろこの相対的否定を通じ、不定の領域に規定された新たな判断対象を指し示す発見の方法として評価する¹⁶。だがヘーゲルにとって未規定な領域にその都度の肯定的規定性を指し示す根拠は、「思弁」の自己還帰する真無限である。この意味での還帰は、有限的な規定性としての「第一の否定」を否定することで成立する「否定的統一」が、相対的否定ではなくむしろあらゆる有限性を廃棄する「総体的否定」を含意することで可能となる。

そのことにより、「精神の存在は骨である」という例に見られるように、「肯定的無限判断」は、当該述語以外のあらゆる述語の「否定的統一」へと開かれると同時に、「否定的統一」から自己還帰する同一性判断である。この点で「個別はただ個別であるが、その個別は肯定的であれ否定的であれ他者に関係するのではなく、ただ自己自身にのみ関係する否定性である」(GW12, 68)とも言えよう¹⁷。尤もこの判断様態の形式は、「個別」そのものに関する„Das Einzelne ist einzeln.“と「否定的統一」に関する„Das allgemeine ist allgemein.“という二つの同一性判断が成立することによって表現される以外にない。だが上記の二判断の「述語はその肯定性によって表現されており、両判断は「外的反省 (äußere Reflexion)」が「個別」と「普遍」というその主述を「比較すること (ausgleichen)」を通じて生じたものに過ぎない (cf. GW12, 69)。言い換えれば「直接性」から「否定性」へと自己自身を止揚する「肯定的無限判断」の否定の総体性は、二つの同一性判断の内には表現し得ない。むしろこの否定性の総体性は、述語領域全体にわたって規定性を廃棄する「否定的無限判断」によって補完的に表現される¹⁸。だが既に見たようにそこではその総体的否定により判断の繫辞 (ist) 自体が破棄されざるを得ない。

これは、「判断の諸規定の自己内反省によって、今や判断が止揚されてしまう」(GW12, 70) 事態とも表現できる。言い換えれば、我々は判断が成立するための限界として、繫辞 (ist) の純粹な同一的關係を、判断述語の「総体的否定」を通じた主語の自己還帰に求めることにより、逆に繫辞そのものを否定し去る絶対的な否定的關係、つまりは判断を消失させるもう片方の限界へと至る。この自己還帰の限り、直接的に存在する「基体」としての判断の主語は廃棄される。逆に否定性によって担われる述語に実体性が移されることによって、「思弁」を体現すべき否定的な關係の論理が、「判断」の成立に関して潜在的に矛盾を含む両限界として析出される。ヘーゲルにとって反省を担う「本質」は、「総体的否定」に同じく「存在の絶対的否定性 (die absolute Negativität)」(GW11, 244) として定義される。その反省は、一面では絶対的否定性それ自体の自己還帰、つまり「差し当たっては無から無への運動であり、したがって自己自身と合致するところの否定である」(GW11, 250) ような肯定的な同一性の運動である。だが他面それは、そのようにして成立する自己同一性を「仮象」として無限に否定し続けるような、「自己以外に自分が否定する何ものをももたず、ただ自己の否定的なものそのものを否定する」否定的關係である¹⁹。あるいはむしろ、後者の「総体的否定」こそが前者の自己還帰による同一性を生じさせると考えれば、絶対的否定性とは「この自己の否定的なものが、この否定すること (Negieren) のなかにのみあるという否定

性」(GW11, 250)である。この意味においてあくまで「思弁」の延長にあるヘーゲルの反省の論理は、総体的否定性を媒介とする自己還帰としての自己内反省を軸に、その両翼に絶対的の同一性と絶対的の区別が相互に支え合う構造を持つ。ここから、前者の絶対的の定立に対し、常にそれを破棄する絶対的の否定の否定する関係が伴われる点から反省論の再解釈を行っていくことが今後の課題となるだろう。

¹ 『命題論』は Loeb Classical Library 325 を参照に用いた。

² 「主語と述語の区別を含む判断ないし命題の本性は思弁命題によって破壊される」(GW9, 43)。

³ 弁証論第一アンチノミーの反定立にあるように、カントにとって「無限 (inifinitus)」述語の問題は無限判断の述語として処理しうるものである（「世界は空間的に有限である」の述語は「非-無限 (nichtunendlich)」(KrV A503/B532) という否定的述語によって言い換えられる）。

⁴ 我が国のカント研究においては、特に石川求と石川文康の間に論争があった。五十嵐 (2015) は両者の論争を論理的視点から分析しようとするごく最近の試みである。論争の主な争点は超越論的仮象の解消を目指す弁証論への無限判断の寄与と、無限判断が肯定判断・否定判断のいずれから区別されるべきか、という点にある。本稿は弁証論への関与は扱わず、無限判断はテキスト通りに肯定判断から区別されるとする、五十嵐、石川求の立場を採る。尤もヴォルフとの哲学史的關係を踏まえればカントの無限判断に不用意に実在性を読み込むことはできない。

⁵ 三重野 (2014) はアリストテレスからドイツ観念論に至る無限判断論の変遷を扱うものであり、マイモンの考察を含め本稿の無限判断論の積極・消極面の整理も負うところが大きい。

⁶ 論理的判断に見られる反省は、「肯定判断の成立するためには合致性 (Einstimmung) へ、否定判断のためには反対性 (Widerstreit) へ、などのそれぞれに到達する」(KrV A262/B318)。

⁷ 肯定・否定判断そのものは次のように述べられる。「質に関して、述語が主語に含まれることを意味する肯定は、等号=によって表され、この等号は客観における合一 (Uebereinstimmung) を意味し、a は b でないという否定判断は「意識の統一において a と b が結びつき得ないことを意味する」(Maimon V, 127)。

⁸ あるいは、内容が捨象された単に論理的で形式的な命題 „-A nicht = A“ は、「反定立の命題 (Satz des Gegensatzens)」である (GA 2, 267)。

⁹ 「総合を欠けば反定立は不可能であり、反定立を欠けば総合は不可能である」(GA2, 276)。

¹⁰ カントのみならず実体の「可分性」を自らと共に主張するスピノザの体系にさえ、フィヒテはそこに真正銘無条件の第一根本命題の洞察が欠けていることを指摘する (cf. GA2, 282)。

¹¹ 「判断」が「根源的分割」であるという洞察はフィヒテの講義録に既に見つかる。しかしヘーゲルには、ヘルダーリンがフィヒテの講義からこの考えを学んだことを介して間接的にそれが伝わったと考えるほうが自然である (cf. Frank 1992, 103-9)。

¹² 晩年の論理学講義ノートには、„Das Einzelne ist allgemein“ がアリストテレスの未規定的判断としての無限判断を念頭に置くものであるという叙述が見つかる (cf. GW 23, 2, 780)。

¹³ 不定判断「B は非-A である」が肯定判断「B は C である」を含意するとしても、そこでは「C が C としてではなく非-A として表現されるに過ぎない。ゆえに「主語が A に対立する C それ自身に仮に關係づけられるとすれば (sich bezögen)、それにより A と C に共通の統一、つまり A と C を同じように包含するより高次の普遍に關係づけられているのである」(GW7, 88)。この叙述において「否定の否定」としての普遍性は、述語の不定性それ自体に認められている。

¹⁴ 概念論一般における「規定された規定性」としての個性 (Individualität) と無限判断論の關連について述べたものとして、Hoffmann (1991) など。

¹⁵ この三段階は所謂「論理的なものの三側面」に段階的に該当する (cf. GW20, 118-20)。

¹⁶ コーヘンはアリストテレスが無限判断の表現に用いた “ouk” がその相対的否定の意味を剥奪した点を非難する (cf. Cohen 1922, 86)。他方フィヒテの無限判断に用いられる否定辞は、「対立」構造を伴う相対的否定性を表すものとして評価される (cf. Cohen 1904, 98)。尤もコーヘン

に対してはナトルブによる再批判があった (cf. Bonsiepen 2006)。

¹⁷ ジェクは『否定的なもののもとへの滞留』において、ラカンに由来するトリアーデ (必要 (need) — 要求 (demand) — 欲望 (desire)) の内に、ヘーゲルの無限判断が表現する、否定的なものであり続ける個体の主体性の範型を見る。乳児が母親に母乳を求めて泣くとき、空腹という自然的必要から食物を要求する相手として、他者が主体に対し立ち現れる。しかしここで主体が真に欲望しているものは、食べ物を与えられることを通じて与えられる他者の愛である。逆から言えば他者の愛への欲望は、他者への要求が、個々の必要を満たす自然的対象によっては述定されない未規定的なものであり続けることで立ち現れる (Žižek (1993, 120-2) を参照。またジェクとヘーゲルの関連についての我が国の最近の研究として、高橋 (2014, 87-108) がある。) ジェクがヘーゲルの方法論として着目するのは絶対的否定性を通じて個体が主体的に振る舞う無限判断の肯定面と言える。後述されるようにここには同時に、無限に未規定的であり続ける措定する働き自体を、無限に否定し続ける無限判断の否定面が伴われねばならない。

¹⁸ Wohlfart は, „Das Einzelne ist nicht einzeln.“ と, „Das allgemeine ist nicht allgemein.“ によって否定的無限判断を表そうとするが、ここで述べられる問題の解決には資さない (cf. Wohlfart 1985, 92)。

¹⁹ 「述語が完全に否定されることによって、[...] 主語と述語への関係が措定されているという仮象のみがあり、その仮象は無へと消失する」 (GW7, 89)。

[参考文献]

1. 全集

- GA: Fichte, Johann. Gottlieb. 1962-2012. *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, herausgegeben von Reinhard Lauth, Erich Fuchs, Hans Gliwitzky und Peter K. Schneider, 42 Bände, Frommann-Holzboog.
- GW: Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. 1968-. *Gesammelte Werke*, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft, herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner Verlag.
- Maimon: Maimon, Salomon. 1965-76. *Gesammelte Werke*, Georg Olms.
- HKA: Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph. 1976-. *Historisch-kritische Ausgabe*, im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Frommann-Holzboog.
- Logica: Wolff, Christian von. 1983. *Gesammelte Werke*, 2. Abt., Bd. 1, Georg Olms.

2. その他の著作

- Bonsiepen, Wolfgang. 2006. “Hegel und der Neukantianismus,” *Hegel-Studien*, 41, 47-112.
- Cohen, Hermann. 1922. *Logik der reinen Erkenntnis*, 3. Aufl, Bruno Cassirer Verlag.
- . 1904. *Ethik des reinen Willens*, Bruno Cassirer Verlag.
- Frank, Manfred. 1992. *Der unendliche Mangel an Sein : Schellings Hegelkritik und die Anfänge der Marxschen Dialektik*, 2. stark erw. und überarbeitete Aufl, Wilhelm Fink Verlag.
- Hoffmann, Thomas, Sören. 1991. *Die absolute Form Modalität, Individualität und das Prinzip der Philosophie nach Kant und Hegel*, Walter de Gruyter.
- Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner. (KrV)
- Wohlfart, Günter. 1985. “Das unendliche Urteil. Zur Interpretation eines Kapitels aus Hegels „Wissenschaft der Logik”,” *Zeitschrift für Philosophische Forschung*, 39 (1), 85-100.
- Žižek, Slavoj. 1993. *Tarrying with the negative : Kant, Hegel, and the critique of ideology*, Duke University Press.
- 五十嵐涼介. 2015. 「無限判断と存在措定」, 『日本カント研究 16』, 日本カント協会編, 115-28.
- 石川文康. 1996. 『カント第三の思考』, 名古屋大学出版会.
- 石川求. 1988. 「無限判断と批判哲学」, 『思索』, 東北大学哲学研究会編, 45-66.
- 高橋一行. 2014. 『他者の所有』, 御茶の水書房.
- 三重野清顕. 2014. 「無限判断論の射程」, 江戸川大学紀要 (24), 65-80.
- (※『純粹理性批判』からの引用は慣例に基づき第一版(1781年)をA、第二版(1787年)をBとし、太字強調はイタリックとした。Wolff, *Philosophia rationalis sive logica* の引用は節番号によって行う)